

国語

(制限時間 五〇分)

注意 一、問題は 一 から 三 まであり、フページまで印刷してあります。

二、答えはすべて別紙の解答用紙に書きなさい。

三、問いのうち、「…選びなさい。」と示されているものについては、ア、イ、ウ…の記号で答えなさい。

また、本文の中からぬき出す場合は、句読点や「」等の符号も一字として数えなさい。

四、本文中の*は、本文の後ろに意味の説明があるという印です。

一 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

「子どもの『個性』を伸ばそう」というような物言いをよく耳にします。個性がある人は素敵^{すてき}な人で、個性の無い人はつまらない人みたいにも言われます。

本当にそうでしょうか。

「個性」というものにあふれた人がいるとします。スカートを頭にかぶり、Ｔシャツをパンツのかわりにはいっています。話す言葉は全部「パピプペポ」の五音だけで構成されています。おそらくこんな人はめったにいません。个性的なのは間違^{まちが}いありません。

でも、こういう人が素敵^{すてき}だと思う人はまずいないでしょう。

人間は、他人とわかりあわなくては生きていけません。だから^①なるべく相手の言うことをわかるうとします。相手にわかる言葉で話そうとします。A 人間の脳というのは、「個性」を出そうとするよりも、なるべくほかの人とわかりあおうとするものなのです。そうしないと、他人と社会で暮らしていくことはできないのです。

では、^②「個性」というものは存在していないのか。そんなことはありません。実は「個性」ははじめから誰^{だれ}にでもあるのです。一人一人のからだにすてにあるのです。

電車に乗ってみればすぐわかります。目の前の座席にすわっている七人は、みな違う顔つき、からだつきをしています。たとえば親の皮膚を子どもの皮膚に移植してはり付けようとしても簡単にはいきません。それぞれのからだに個性があるからです。

大リーグで活躍^{かつやく}しているイチロー選手は、きっと大変な努力をしていることでしょう。でも、彼^{かれ}よりも練習している選手だっているかもしれません。それでもイチロー選手がナンバーワンなのはなぜか。イチロー選手はすばらしく野球に向いたからだに生まれてきたという面があるのです。

そう考えれば、無理に「個性を伸ばさなくちゃ」などと思う必要はありません。放っておいても、自分らしいところというものはあるはずす。無理に^③人と違うようになるよりは、他人の気持ち^{かみち}がわかるようになったほうがいいのです。

今では、多くの人が「個性」は脳のなかにあつて、からだにはないという勘違^{かたが}いをしています。だから学校の教育で簡単に「個性」を伸ばすことができるのだと思つてゐるのです。

とつびなことはかりして何を考えてゐるのかわからない人と、こちらの気持ちをわかってくれる人。どちらと仲良くしたいかは、言うまでもありません。

多くの人が「個性」というものについて勘違^④いをしてゐるということをお話しました。同じように「情報」というものについても、勘違^④いしている人が多いようです。

「情報」というと次々に新しいものが目まぐるしく登場し、変化してゐるように思つてゐないでしょうか。その反対に「わたし」は変化しない、いつも同じだ、と思つてゐないでしょうか。

これは実はあべこべです。

「情報」は変化しませんし、「わたし」は常に変化しています。B C Dに入っている音楽は、いつどこで再生しても同じです。昨日は上手だったのに、今日は音痴おとぢになっている、なんてこともありません。

その一方で「わたし」はどうでしょうか。子どものうちは、一晩ばんか寝れば少しずつ大きくなっています。大人になると変化しないでしょうか。そんなことはありません。

人間のからだの大部分は水で出来ています。この水は少しずつ入れ替わっています。一年間もあれば、ほとんど全部入れ替わります。つまり、去年の「わたし」と今年の「わたし」ではからだの大部分が別物なのです。

現代人の多くは「わたしはわたしで変わらないものだ」と思いがちです。でも、それは大間違いなのです。からだだけではなく、頭の中だって変わります。

まえば大親友だと思っていた友だちと進級して別のクラスになったら、だんだん話をしなくなる、ということがあります。以前は毎日話をしないと不安だったのに、今ではたまに会っても何を話していいのやらとなったのです。それは相手が変わったのでしょうか。もちろん、そういう面もあるでしょう。それ以上に「わたし」の心が変わったのです。

勉強をして新しい知識を得ると、世の中の見方が変わるといこともあります。星座を知らないうちは、満天の夜空を見ても「星がいっぱいあってきれいだなあ」と思うだけでしよう。

それが星座を勉強したあとならば、「あれがオリオン座で、あれがこぐま座で……」というふうに見えてきます。星は何億年も前から変わっていません。変わったのは「わたし」のほうなのです。

⑤ 「個性」は 1 ではなく 2 にあるということ、そして「わたし」のからだは、日々変化していくものだということを話しました。このへんを勘違いしている人が多いということも。

C なぜそういう勘違いが起きるのでしょうか。それは多くの人が、からだのことを忘れているからです。自分の脳がすべてだと思っているのです。本当は脳だって、からだの一部分に過ぎないのですが。

からだを使うことと脳の発達には大きな関係があります。赤ちゃんは「歩き方入門」を読んで頭で理解して歩けるようになるわけではありません。何度も転んでいるうちに、すこしずつハイハイから進んで、歩けるようになるのです。

⑥ 「文武両道」ということを聞いたことがあるでしょうか。武士がいたころのことばで、「学問も武道もどちらもできなくてはいけない」というような意味だと一般的には思われています。

D 、これは「学問と武道（からだを使うこと）の両方を使って、たがいに影響しあわないと向上しない」という意味なのではないでしょうか。からだで学んだことが頭に影響する。そこで考えたことでまた自分の行動が変わる。そういうことではないかと思うのです。

（養老孟司「13歳からの『バカの壁』」より ※ 問題作成の都合上、本文を一部省略しています。）

問一 A 〽 D にあてはまる接続語を次から一つずつ選びなさい。

A そして イ では ウ しかし エ ただし オ つまり カ たとえば

問二 線部①「なるべく」に係っていく部分を次から一つ選びなさい。

A だから イ 相手の ウ 言うことを エ わかろうと オ します

問三 次の文は、本文中のある段落の初めにあったものです。もどすのにふさわしい段落の初めの五字を答えなさい。

見た目だけではありません。

問四 線部②「個性」というものは存在していないのか」について、次の問いに答えなさい。

(1) 「個性」を言いかえた表現を、本文中から八字でぬき出しなさい。

(2) 「個性」というものは存在していないのか」とありますが、筆者はどのように考えていますか。解答らんに合うように、本文中の言葉を使って、十五字以上二十字以内で答えなさい。

問五 —— 線部③ 「人と違うようになってしまったほうがいい」のは何のためですか。「うため」につながるように、本文中から十五字以内でぬき出しなさい。

問六 —— 線部④ 「勘違いしている」とありますが、「情報」と「わたし」について、どのように勘違いをしているのですか。最もふさわしいものを次から選びなさい。

- ア 「情報」は変化しないが、「わたし」は常に変化している。
- イ 「情報」も「わたし」も、同じように常に変化している。
- ウ 「情報」と「わたし」の両方が、共に変化することはない。
- エ 「情報」は変化するが、「わたし」が変化することはない。
- オ 「情報」の質によって、「わたし」の変化の仕方がかわる。

問七 —— 線部⑤ 「個性」は [1] ではなく [2] にある」の [] にあてはまる言葉の組み合わせとして、最もふさわしいものを次から選びなさい。

- ア 脳 —— からだ イ 他人 —— 自分 ウ からだの一部 —— からだ全体
- エ 教育 —— 素質 オ 脳 —— ころ

問八 —— 線部⑥ 「文武両道」はどんなことを言うための例として挙げられていますか。ここより前にある本文中の言葉を使って、三十字以内で答えなさい。

問九 ……線部「勉強をして新しい知識を得ると、世の中の見方が変わる」とありますが、勉強をして知ったことで見方が変わったあなた自身の体験を、「星の見え方の変化」の例を参考にして、答えなさい。(人や本やテレビなどから知ったことでもよい。)

二 下の歌詞は、横原敬之作詞「世界に一つだけの花」の一部を引用したものです。この歌詞について、後の問いに答えなさい。

<p>花屋の店先に並んだ いろんな花を見ていた ひとそれぞれ好みはあるけど どれもみんなきれいだね この中で誰が一番だなんて 争うこともしないで バケツの中誇らしげに しゃんと胸を張っている それなのにぼくら人間は どうしてこうも比べたがる？</p>	<p>一人一人違うのにその中で 一番になりたがる？ そうさ 僕は 世界に一つだけの花 一人一人違う種を持つ その花を咲かせることだけに 一生懸命になればいい</p>
--	--

問 横原敬之氏と [] の筆者の養老孟司氏の考え方の共通点を次のようにまとめました。 [] にあてはまる言葉を、 [] の

本文中から二字でぬき出しなさい。

人はだれも、ほかの人と比べようのない、かけがえのない [] を持っている。

夏の県大会を終え、通例によって三年生の俺たちは野球部を引退した。

だからといって、野球ばかりやっていて俺たちが受験勉強に^アセンネンするわけもなく、なんとなく集まっては、相変^イわらず^ロバカ話に花を咲かせていた。

話題の中心は修学旅行。

何といっても中学生生活最後の大会^ニイベントだ。

俺たちは思いっきり楽しもうと、行き先での宮崎のことをなんだかんだと話し合っていた。

ところが、久保ひとりが話に乗ってこない。

「久保、どうした？」

「え？」

「お前も話に入れよ。宮崎っちゅうところは、いいところらしいぞ」

「うん……」

「どうした？　なんか様子がおかしいぞ」

③「俺、修学旅行には行かん」と

久保は思いきったように一気にそう言った。

「なしてや？」

「なんて行かん？」

一斉^セにみんなが久保に詰め寄ったが、何故行かないのか、④久保はそれ以上、詳しいことは何も言わなかった。

久保はセンターを守っていた、口数の少ないやつだったが、それだけ強情を張るのも珍しいことだった。

気になった俺は、翌日、あまり誰も来ない相撲道場の裏に久保を呼びだして事情を聞いた。

「修学旅行、なんて行かん？　一年の時から、ずっと積み立てしとったやろう？」

「……………」

「せつかく、みんな行くから、一緒に行くこう」

「……………」

「何か事情があつとね？」

「……………」

「一緒に三年間、頑張ってきた仲間やろう？　何かあったと？」

「親が……………」

「え？」

久保は、消え入りそうな声で言った。

「かあちゃんが入院した。それで金が必要になったから、積み立ては、下ろしたと」

「……………」

今度は、俺が黙ってしまふ番だった。

毎日、一緒にいたのに久保のかあちゃんが病気だということさえ知らなかった。

「徳永、かあちゃんのこと、みんなには内緒にしとって」

久保は、今度は真っ直ぐに俺の目を見て言った。

「……………分かった」

俺は、誰にも言わないと固く約束した。

どんなに親しい奴にでも、家の事情をあれこれ言ったりするのは恥^はずかしい。

俺たちは、まさにそんな時期にあったのだ。

俺もずっと貧乏^{びんぼう}だったから、久保の気持ちはよく分かった。でも、俺はあきらめきれなかった。

三年間一緒に頑張ってきた野球部員の、ひとりも欠けることなく修学旅行に行きたかった。そして、野球部員たちに召集^{しゅうせい}をかけた。

「あのな、詳しい事情は分からんけど、久保、積み立てしてなかったらしい」「え？」

「なあ、みんなでアルバイトして久保の旅行費^{りょこうばい}稼いでくれんか？」

「よし、みんなで久保を旅行に連れて行こう！」

俺の提案にみんなが賛成してくれ、俺たちはそれぞれバイト^{*}を始めた。暑いさなか、俺たちは懸命^{けんめい}に働いた。

その結果、一人ひとりの稼ぎは少なかったが、全員を合わせると目標の二万円を達成することができた。

俺たちは、やり遂^とげたことに **A** していた。

「きつと久保、涙流^{なみだ}して喜ぶぞ」

そんなことを話し合いながら、早速、久保を呼び出すと二万円の入った封筒^{ふうとう}を差し出した。

「これ、使ってくれ」

「何？」

「みんなでバイトした。二万円ある。これで一緒に修学旅行、行こう」

しかし、久保の示した態度は、俺たちの予想と全く違^{ちが}っていた。

「受け取れん」

^{*} 憮然^{ぶぜん}としてそう言った久保に、うかれていた俺たちは **B** すかしをくったような気分だった。

「どうしてや？」

「一緒に修学旅行行こう！」

「せつかく、みんなでバイトしたとばい……」

みんなで説得^{せつとく}しても、久保はなかなか金を受け取らなかったが、最後に、

「分かった。預かっどく」

とだけ短く言って、封筒をポケットにしまった。

「よし、久保！」

「これで全員揃^{もよ}ったと！」

「野球部は、ずっと一緒だー！」

俺たちは歓声^{かんせい}を上げた。

帰り道でも、ずっとずっとはしゃいでいた。

だが久保は、修学旅行の朝、とうとうやって来なかった。

「久保、どうしたと？」

「金だけ取りやがって」

楽しい修学旅行の間中、誰かがそう言っっては久保をのしった。

俺たちは、佐賀に帰ったら真っ先に久保を部屋に呼び出そうと決めていた。

約束の時間に、俺たちが揃って部屋へ行くと、久保はもう来ていた。

俺は久保の顔を見るなり、頭にカーツと血^ちが昇^{のぼ}った。

暑い盛り^{さむ}り、バイトに働^{はたら}んだ自分たちがバカみたいだと思った。

そして思った瞬間^{しゅんかん}には、ブチ切れていた。

「久保ー！ お前、なんで来なかった？ みんながせつかくバイトした金、使い込んだのか!？」

荒々^{あらから}しくつかみかかった拍子^{ひょうし}に、久保の座^まっていた椅子^{いす}はバランスを崩^{くずれ}し、久保は床^{ゆか}に倒^{たお}れ込んだ。

「何とか言え。使い込んだとやるう？」

激しく言い募る俺に圧倒されながらも、久保は、はつきりと言った。

「……違う」

「何が違う？」

「修学旅行には、はじめから行かないつもりやった。あのお金は、これ買った。後輩に残そうと思って」
起きあがった久保が、大きな紙袋から出して来たのは、真新しいキャッチャーミットとバット、それにボールが三ヶ
スだった。

目に痛いほどの、ピカピカの道具を見た瞬間、俺は思い出した。

久保は「C」と言ったわけではなかったことを。

俺たちにナカは押しつけられるようにして金を受け取った久保は、

「預かっつく」

と言ったのだった。

あの時から、^⑤久保の心は決まっていたのに違いない。

「ごめん、久保、ごめんな」

俺は、生まれて初めて土下座というものをした。

別に、土下座して謝らなければと思っただけではないが、心から謝りたいという気持ちが、俺の頭を地面にこすりつけさせた。

部員たちも、みんな同じ気持ちだったのだろう。

泣きながら、

「ごめん、ごめんな」

と言いながら、頭を床にこすりつけている。

「よか、よか。もう、よかとよ」

久保は、土下座している俺の肩をつかんで立ち上がらせながら言った。

久保の穏やかな笑顔を見ながら、俺は、いつだったか聞いたばあちゃんの言葉を思い出していた。

^⑥「本当の優しさとは、相手に気づかれずにするこ」

俺たちは、どうだっただろうか。

久保に頼まれたわけでもないのに勝手にバイトして、金を押しつけて、旅行に来なかったと怒って。

久保への優しさなんか、どこにもない。

俺たちは、俺たちが満足したいがためだけに、久保に親切を押し売りしていたのだった。

俺は、キャプテンの威厳も忘れて泣き続けた。

自分のバカさ加減が情けなかった。

久保は、

「よか、もうよか」

と、泣いている俺たちに、何度も何度も繰り返した。

(島田洋七「佐賀のがばいばあちゃん」より ※ 問題作成の都合上、本文を一部省略しています。)

【語注】

バイト Ⅱ アルバイト。学生が、勉強のかたわら、収入を得るためにする仕事。

無然と Ⅱ 「こまったものだが、なんとも言いようがない」という、失望感や不満でやりきれない思いをいだいている様子。

問二 — B にあてはまる体の一部を表す言葉を答えなさい。

問三 — 線部①「バカ話に花を咲かせていた」の意味として最もふさわしいものを次から選びなさい。

- ア ばかばかしい事を大げさに話していた。
- イ みんなで楽しめる話題をさがしていた。
- ウ たわいない話をしておりあがっていた。
- エ たいくつまぎれにうわさ話をしていた。
- オ くだらない話をして暇をつぶしていた。

問四 — 線部②「イベント」の意味としてふさわしいものを次から一つ選びなさい。

- ア 行事
- イ 旅行
- ウ 仕事
- エ 試合
- オ 活躍

問五 — 線部③「俺、修学旅行には行かん」とありますが、その理由が述べられている会話部分の初めと終わりの五字を答えなさい。

問六 — 線部④「久保はそれ以上、詳しいことは何も言わなかった」について、次の問いに答えなさい。

- (1) 久保が詳しいことを言わなかったのはなぜですか。本文中の言葉を使って、三十五字以内で答えなさい。
- (2) (1)で答えた久保の気持ちを「俺」が理解したことがはっきりわかる一文の初めの五字を答えなさい。

問七 — A にあてはまる二字の熟語を本文中からぬき出しなさい。

問八 — C にあてはまる言葉を、本文中の言葉を使って五字前後で答えなさい。

問九 — 線部⑤「久保の心は決まっていた」とありますが、久保はどのように考えていたのだと思われませんか。最もふさわしいものを次から選びなさい。

ア 自分をあわれんだ野球部の仲間**に強い反発を感じた**。だが、それを表に出すことはできないので、かれらが自分に謝らなければならぬような状況を作って見返してやろう。

イ 自分のためにアルバイトをして修学旅行の費用をためてくれた野球部の仲間の思いにこたえるためにも修学旅行には行きたい。しかし、母の看病があるのであきらめるしかない。

ウ 家の事情に関係なく、修学旅行には初めから行かないつもりだった。その本心を知らずにお金を稼いでくれた野球部の仲間にわびるには、後輩に残せるものを買うしかない。

エ 野球部の仲間同士として対等に付き合ってきたのに同情される立場になった自分が情けない。だから、同情してもらわないといけないことを、修学旅行に行かないことで皆に示そう。

オ 自分のためを思ってくれる野球部の仲間の気持ちはとてもうれしいが、それに甘えることはできない。だから、みんなの思いを無にせず、喜んでもらえることにこのお金を使おう。

問十 — 線部⑥『『本当の優しさとは、相手に気づかれずにすること』俺たちは、どうだっただろうか』とありますが、自分自身に対して「俺」はどんな気持ちでいっぱいになっていますか。本文中の言葉を使って、四十五字以上五十五字以内で答えなさい。